

「なぜインターに？」と、きまって同じ質問をされた

「なぜ、インターに入れたんですか？」

と、よく聞かれたものだ。

世間話で子供の話になったとき、私の娘がインターナショナル・スクールに通っていると知ると、フツーの人は必ずこう聞いてきた。

最初のころは、その理由をいくつか述べ、「これからは国際化の時代ですから」と私は言っていたが、あるときからピタリとやめた。というのは、これがじつに嫌みな答えだとわかったからだ。

もうひとつ、フツーの人が聞いてくるのは、「学校ではぜんぶ英語ですか？」と「家でも英語を？」ということだった。最初の質問は「はい」で、次の質問は「いいえ」だ。なぜなら、英語は娘しか話せないからである。もちろん、私はちょっとは話せる。しかし、それは聞くに耐えない、英語とは言い難いジャパングリッシュだ。

インターに入れたとき、3歳だった娘に最初に教えた英語は、「pee-pee」である。文にすると、「I wanna make a pee-pee.」。つまり、「おしっこがしたい」。これが言えないと、トイレに行けない。

幼稚園だから、これがいちばん重要な英語である。だから、日本の英語の教科書が「I am a boy.」や「This is a pen.」で始まるのは、根本的に間違っている。

それはともかく、インターに入れた理由を聞かれたとき、のちに私が答えるようになったのは、「じつは、親戚もインターだったんで、それで入れたんです」である。事実、そのとおりだったからだ。

従姉に勧められたセントジョセフ入学

1987年の夏、私の従妹がやってきて、こう言った。

「奈保ちゃん（私の娘の名前）、これからどうするの？
来年は幼稚園でしょ。あんた、なにかあてがあるの？」

私も妻もまだそんな話をするのは早いと思っていたが、従姉は続けてこう言った。

「ないなら、セント（セントジョセフ・インターナショナル・スクールのこと）のキンダーに入れたら。私が頼んでみるから」

この年の6月、従姉のひとり息子は、セントのハイスクールを卒業して、9月からアメリカのブラウン大学進学が決まっていた。

セントのことは、横浜の人間なら誰でも知っている。横浜には3つのインターナショナル・スクール（セントジョセフ、サンモール、YIS）があり、男女共学はYISだけで、セントは男子校、サンモールは女子校だった。ただ、これは昔の話であり、この頃はどちらも男女共学になっていたから、私の娘がセントに行くことは可能だった。

しかし、インターナショナル・スクールといえば、在住外国人の子供や帰国子女が行く学校

であって、私のようなまったくの日本人の子供が行くような学校ではない。

従姉の息子のある特殊な事情

ならば、なぜ、従姉の息子はセントに行っていたのだろうか？
それは、特殊な事情で、彼が遺伝子の突然変異によるアルビノ（先天性色素欠乏症）として生まれてきたからだ。

従姉は、その子を普通の子供と同じように育てようとしたが、日本の学校では差別されるのではと恐れた。それで、それだけは回避しようと、ツテを頼ってセントに入れたのである。

セントは彼を受け入れてくれて、彼自身も日本の社会のなかで障害を意識して育つのと比べたら、ずっと自由に、すくすくと育った。成績もよかった。だから、ブラウンにも受かった。

ちなみに、彼はその後インディアナ大学の大学院で言語学のPhD.を取り、日本に戻って、いまは法政大学で助教授をやっている。

「セントはいい学校よ。日本の幼稚園に入れるなら、セントのキンダーのほうが絶対いいから」

と、従姉は言った。

「パパが生きていたら大反対したでしょうね」と母

8月の初め、妻は娘を連れてセントに面接を受けに行った。このとき、面接をしてくれたのは、当時学長補佐をしていたジェフリー・ミラー氏で、彼は日本語がペラペラだった。

私は、てっきり英語の面接だと思い心配したが、帰ってきた妻が「全部日本語だった」と言うので、なんだそんなものなのかと思った。

面接から数日で、娘の入学が決まった。そして、9月から来てくださいというので、娘は普通の日本人の子供の年齢より早く、幼稚園に通うことになった。

この年、娘と一緒にキンダーに入ったのは5人だった。ひとつ上のクラスには、故・三船敏郎さんの娘の美佳ちゃんや、その後モデルとして活躍する鮎川ナオミ（ナオミ・ウェイト）ちゃんなどがいた。

娘がセントに行くときだったとき、母はこう言った。

「パパが生きていたら大反対したでしょうね。日本人なのになんだって」

私の父は、娘の誕生の1ヶ月後、お食い初めをした日の夜に2度目の心臓発作で倒れ、そのまま死んでいる。初孫の誕生を楽しみしていたが、まるで入れ代わるようにあの世に逝ってしまった。

それにしても、母は横浜の人間で、戦前の横浜英和女学校を卒業したにもかかわらず、父と同じようにインターナショナル・スクールは日本人が行くところではないと思い込んでいた。

半年で英語のほうを先に話すようになった

セントは、娘を入れてみると本当にいい学校で、なにしろ、クラスに生徒は5人だけというのがよかった。もちろん、学校内は全部英語だが、まだ日本語も十分でない年齢の子供にとっては、母国語と外国語の区別などあまり関係ないように見えた。

最初はとまどったと思うが、半年もしないうちに英語のほうを先に話すようになった。

英語で大変なのは、親のほうだった。私は、あわてて英会話のテープを買いこみ、それまで毎週のようにしていた徹夜麻雀を控えてテープを聞き、妻と2人で根岸ベースのアメリカ人家庭に英語を習いに通った。

しかし、いまでも英語はダメだ。完全に大人になってから習う外国語は、どうしても日本語の回路を通してインプット、アウトプットされる。だから、ネイティブのようにには絶対にしゃべれない。

結局、いまでも私は英語が苦手だ。

かなりカッコをつけた私のコメント

さて、ここで、前回の[003]で紹介した雑誌『UPDATE』に話を戻し、私たち一家のインタビューコラムを再録しておきたい。

《日本の学校へは編入できないことを承知の上で、子どもを幼稚園からセントジョセフへ通わせている山田順、佐保ご夫妻。奈保ちゃん（5歳）は、一昨年9月に入園した。

きっかけは？ 「親戚の子どもが通っているのを知っていたのが消極的理由です。積極的な理由はふたつあります。まず、英語がしゃべれるようになってほしかった。しかも自然に。自分達が中学から学んできたにもかかわらず話せないのは、語学生活の初めに英語にふれていなかったからだと思うのです。それに今後ますます、英語は必要になるでしょうから。次の理由は、不得意の科目を無理やり勉強させて、平均的人間を作ろうとする日本の教育への疑問からです。自分の子どもには、その人間の長所をより伸ばせる教育を受けさせたかった。自分のアピールできる面を知っている人間は、人生に対して積極的になれるから」

奈保さんの反応は？ 「最初は嫌がっていましたが、そのうちに右と左の感覚を“ライト、レフト”で覚えたように、体全体で吸収しているようですね。私達も娘の友達の外国人の家を訪れて、英会話のレッスン中です。

年間の学費は約100万円ですが、日本の学校へ通いながら家庭教師、塾に費やすのとほぼ同じ金額になるのではないのでしょうか。それに金銭よりも質を重視したいですからね」》

いま読み返すと恥ずかしいが、私はなんてカッコつけて答えるのだろう。「平均的人間を作る日本の教育」だのと、大上段に構えて述べているのは、若気の至りと言うしかない。